



隋末唐初期における突厥第一可汗国と北中国

著者	齊藤 茂雄
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	49
ページ	121-138
発行年	2016-04-01
その他のタイトル	Northern China and the First Turkic Qaghanate in the late Sui to early Tang dynasty
URL	http://hdl.handle.net/10112/10266

隋末唐初期における突厥第一可汗国と北中国

齊藤 茂雄

はじめに

近年、「東部ユーラシア」という視点から内陸アジア遊牧民族史を捉えなおすことが喫緊の課題となっている。「東部ユーラシア」とは、これまで「東アジア」や「内陸アジア」などの地域ごとに細分化されてきた歴史研究を、より広い地域の連動性の中で捉えなおす動きであり、主としてモンゴル高原を中心とする内陸アジア遊牧世界と、中国を中心とする東アジア農耕世界の連動性に焦点が当たっている。⁽¹⁾

一方で、「農牧接壌地帯」という概念も重要視されている。ここはユーラシアの東西に長く連なる、農耕と遊牧、両生業が成立可能な中間地帯である。この名称自体は森安「二〇〇七、六〇―六一頁」によるものであるが、同様の概念に焦点を当てた見方はそれ以前から存在する。特に、石見清裕「一九九九、二九六―二九

八頁」はラティモアのリザーヴァー Reservoir 論を発展させてこの中間地帯を積極的に再評価する。すなわち、この地域は北中国に広く存在しており、この地域にモンゴル高原から流入した遊牧民が中国王朝に帰順して北辺防衛を担い、やがては中国史を大きく展開させる原動力となる、と指摘する。⁽²⁾ さらに、この地域が持つ両面性も指摘し、中国王朝の北辺防衛を担うこともあれば、モンゴル高原の遊牧勢力と呼応して反乱の引き金になることも指摘している「石見一九九九、二九三―二九六頁」。この石見氏ほかの見通しをもとに、農牧接壌地帯で活動していた遊牧民、唐代史の中でどのような役割を担っていたのか、その実態解明が進んでおり、⁽³⁾ 遊牧民族史の文脈では突厥第二可汗国を農牧接壌地帯からモンゴル高原へと進出した勢力と捉えた、鈴木「二〇〇六、二五―二六頁」がある。

このように、農牧接壌地帯に対する研究が重要になってはいる

が、モンゴル高原の遊牧勢力がこの中間地帯にどのように接触していたのかという問題は、ほとんど検討されていないのが実情である。石見氏の言う「両面性」とはどのような意味合いを持っているのか、さらに検討を進めていく必要がある。

そこで、本稿では、筆者の関心にとり、隋末唐初期の戦乱期において、モンゴル高原のトルコ系騎馬遊牧国家である突厥第

一可汗国^④が農牧接壤地帯にどのように接触をしていたのかを検討してみたい。隋末唐初期の戦乱とは、隋第二代煬帝の失政により、六一〇（大業六）年ごろから中国各地で反乱が頻発することとなり、各地に拠点を持った群雄が割拠した時代のこと、唐が中国を統一することでこの戦乱は終結したのであるが、この戦乱の展開に突厥が深く関わっていたことがこれまで指摘されている。

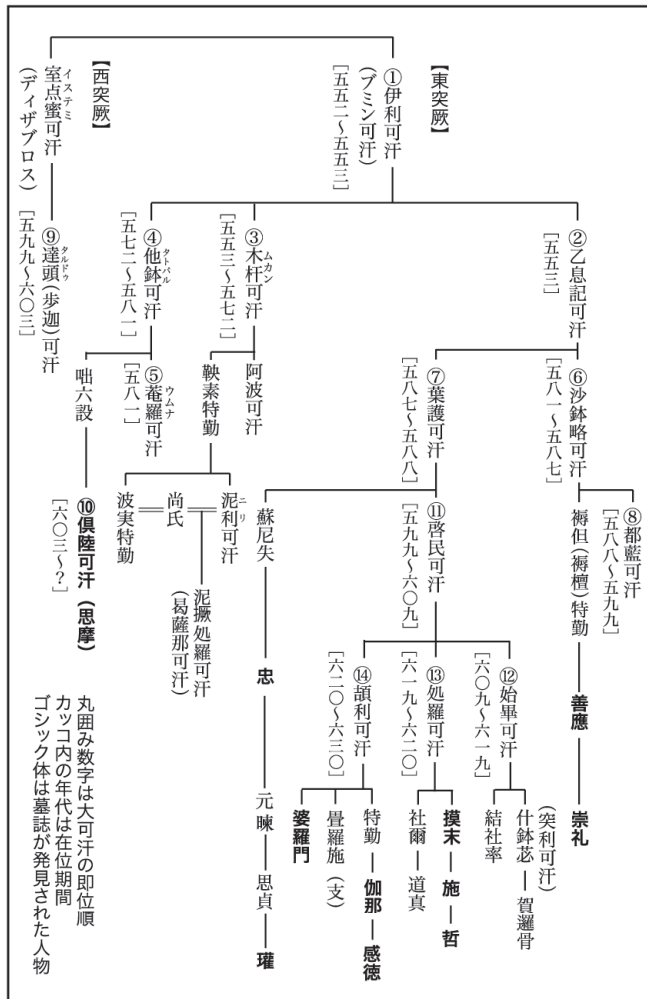


図1 突厥第一可汗国系図

隋末唐初期における突厥と唐をめぐる歴史展開は、まさに農牧接壤地帯上で事態が進行しており、その実態を知る上で意義深いと思われるが、議論が十分に進んでいないのである。まして、近年ヴェシエール氏によつて、当該時期の突厥の中心地が漠北ではなく漠南にあったと論証された^⑤からには、なおさら北中国との関係を議論する意義は大きい。分裂している北中国に対して、隣接する最大勢力が突厥であったことが明らかになつたのであり、突厥そのものが農牧接壤地帯に進出した時代とも捉えることができるからである。以上のような問題関心に基づき、突厥・唐

の間にあつた遊牧民や群雄たちの動向を考えることによつて、突厥と農牧接壤地帯の関係について論じてみたい。

一、先行研究の整理

この隋末唐初期の展開と突厥の関係について、これまで様々な角度から議論が行われてきた。まず、唐の初代皇帝である李淵が太原で挙兵し長安を制圧した際に、李淵が他の北中国の群雄たちと同じく突厥に称臣したと指摘した陳寅恪「二九五」がある。

この説には李樹桐「一九六五、一九七二、一九八八」が反論しているものの、李説を王栄全「一九九八」が再反論するなど、陳寅恪氏の説に多くの学者が賛同している。唐は突厥に臣従する状態から挙兵し、最終的には六三〇年に突厥第一可汗国の頡利可汗を捕縛して滅亡させるまでに勢力を拡大していったのである。

さらに、石見清裕「一九九八」や呉玉貴「二九九八」、牛致功「二〇〇二」は、隋末唐初期の北中国の歴史展開に突厥がどのような役割を果たしたかを検討している。中でも、石見「二九九八、第一部第三章」は突厥が隋から出嫁された義城公主を通じて、隋室の生き残りである楊政道を保護したことを明らかにし、このことが唐との間に全面的な対立を生む原因となつたと指摘した。また、李方「二〇〇三」は、突厥の北中国への介入を三段階の時期に分けて論じている。まず、突厥が北中国と関わりを持ちだした六一三年から、李淵を含む大規模な群雄が突厥の支持を求めるに

いたつた六一九年までを第一段階とする。この時期には突厥は背後から北中国に介入していて、積極的ではないという。次の第二段階は、隋が滅亡し、突厥が北中国の覇者となつた六一九〜六二〇年で、やはり楊政道の保護を重要視する。第三段階は唐が群雄割拠の状態から抜け出し、突厥と全面対立にいたつた六二〇年から、唐が突厥を滅ぼすまでの六三〇年としている。これらの研究によつて、隋末唐初期の戦乱に突厥がいかに関わつたか、その概要が明らかになつたと言えよう。

次に、突厥が隋との臣属状態を破棄する象徴的な事件となつた「雁門事変」についても多くの研究がある。これは、六一五（大業十一）年に始畢可汗が煬帝の車駕を襲撃した事件である。煬帝はかろうじて雁門の城郭に避難したが、始畢可汗はその城郭を取り囲み、三十二日間包囲し続けた。煬帝は始畢可汗に出嫁していた義城公主の助けを借りてかろうじて難を逃れた。この事件については、突厥が君臣関係を離脱した理由、煬帝が雁門付近に巡幸していた理由や、事件の具体的な経緯に議論が集中している。

一方で、護雅夫氏は突厥第二可汗国（六八二〜七四五年）も含む突厥と北朝隋唐との国家間のパワーバランスを、両者の名分関係に着目して考察した中で、隋末唐初期の状況についても触れている。そこでは、北中国の混乱に乗じて突厥では中央集権化が進められた時期であり、比較的継続して「敵国」関係が突厥と中国王朝間に結ばれた時期であるとされている「護一九六七、二一三

「二一四頁」が、長い突厥可汗国史の一場面としてこの時代を取り上げているだけで詳しい議論は行われていない点が惜しまれる。

このように、様々な研究者がそれぞれの立場から隋末唐初期に突厥が介入したことを述べているが、ほとんどの研究者が突厥と唐という国家間の関係に焦点を置いているため、実際に農牧接壊地帯で活動していた個々の人々に対しての議論は極少ない。筆者は前稿「齊藤二〇一五」で初期の羈縻支配を委任された個々の突厥有力者の動向に着目し、彼らが李世民と密かに盟約を結んでいたことを指摘し、その盟約が後に突厥の羈縻支配を行う際に重要な意義を持ったことを明らかにした。このように、国と国の間で立ち回る個々人に注目することが農牧接壊地帯研究には必要なのである。

そこで、次章以下では農牧接壊地帯で活動する人々の動向に着目し、彼らがいかに突厥・唐と関わっていたのかを具体的に検討していく。

二、突厥の人々の動向

個々の突厥人たちの動向でまず注目されるのは執失氏である。執失氏は突厥第一可汗国期に現れる有力部族で、その中でも、執失思力は太宗期にいわゆる「蕃將」として重用された人物である。もともと執失思力は頡利可汗の腹心として、二度唐朝に使者として送られている人物で、突厥滅亡とともに唐朝に帰順した

『通典』卷一九七「突厥上」(五四一〇—五四一一頁) / 『新唐書』卷一〇「執失思力伝」(四一一六頁)」。この執失氏には、「執失奉節墓誌」と「執失善光墓誌」という執失思力の近親者の墓誌が現存しており、執失奉節は思力の息子に当たり、善光は思力の弟の子、甥に当たる「石見二〇〇七A、三七〇、三七五頁」。この両墓誌から隋末唐初期の執失氏の動向がかなり詳細に判明するたため、貴重である。

では、まずは「善光墓誌」の記述を見てみよう。

「執失善光墓誌」三〇九行目「氣賀澤編二〇〇九、一一八」

曾祖の淹は、本蕃の頡利發エルテベルなり。皇初めて太原に起するに、數千騎を領いて援接して京に至れば、功を以て金紫光祿大夫・上柱国を拜す。仍ほ特制を降し、執失を以て永く突厥の大姓と爲し、新昌縣に功政碑を樹つ。…(中略)…祖の武は、本蕃の頡利發エルテベルなり。元勳の子なるを以て、皇は上大將軍・右衛大將軍・上柱国・安國公を授く。時に于いて頡利可汗は百萬の衆を率いて寇して渭橋に至り、蟻結蜂飛し、雲屯霧合す。祖は即ち長子の思力を遣わして入朝して獻策せしむ。太宗は其の誠節を嘉し、其の謀効を取れば、李靖と與に計会し、内外に應接せしめ、因りて頡利可汗を擒えしむ。賊徒もて盡く獲るに、太宗は思力と與に血を飲りて盟いて曰わく、「代代の子孫まで、相い侵擾する無かれ」と。即ち金券を賜い、九江公主に尚はすに因り、駙馬都尉とし、武に輔國大將軍を贈る。⁽⁸⁾

記述されているところによると、執失善光の曾祖父（思力から見ると祖父）は淹といい、祖父（同じく父）は武と違って、両者とも突厥の頡利発^{エルテベ} eltabar だったという。エルテベは突厥支配下の首領が帯びる称号で、従来から世襲であることが指摘されていた【護一九六七、四二七頁／Bonhaci 1970, p.52】が、その貴重な実例として注目される。

次に、唐との接点を見ると、太原で李淵が起兵した際に数千騎を率いて長安制圧を援助したという。最初にこの墓誌を検討した牛致功氏は、この執失淹の騎馬軍団とは、突厥から唐に送られた二千騎の援軍であることを明らかにした【牛致功二〇〇二、九二頁】。

『通典』卷一九七「边防十三突厥上」（五四〇七頁）

大唐は太原に起義するに、劉文靜は其の國を聘い、引きて以て援けと為さしむ。始畢は特勤・康稍利を遣わして馬千匹を獻じ、絳郡に會せしめ、又た二千騎を遣わして軍を助け、京城を平らぐるに従わしむ。

この記述にある二千騎に当たるのが、「善光墓誌」にある執失氏の数千騎であるという指摘である。この功績によって、執失淹とその子の武は、高祖から金紫光祿太夫・上柱国の位を受けた。このように、執失氏と唐は、高祖の時代に接点が見られたのである。

さらに、太宗の時代になると武の子である思力との間で接点が見られる。墓誌には頡利可汗が百万の兵を率いて渭橋に侵攻した

ことが記されているが、この事件は太宗が玄武門の変で即位した直後の六二六（武徳九）年に発生した突厥の大規模侵攻で、長安近郊の便橋（西渭橋）まで頡利可汗が到来したため、太宗が自ら交渉に当たり、多額の「金帛」を贈って退却させたという【那波一九六五、九一二頁／吳玉貴一九九八、二〇一―二〇三頁¹⁰】。執失思力はこの侵攻の際に突厥側の使者として唐朝廷に送られている。その様子は典籍史料では次のように記される。

『通典』卷一九七「边防十三突厥上」（五四〇九―五四一〇頁）

（武徳九年八月）癸未（二十八日）、頡利は其の腹心の執失思力を遣わして來朝せしめ、自ら形勢を張りて云わく、「兵百萬今至るなり」と。太宗之を詰めて曰わく、「我突厥と面自和親するも、汝則ち之に背けば、我實に愧づる無し。又た義軍入京の初め、爾父子は並びに親しく我に従えば、爾に玉帛を賜い、前後に極めて多し。何の故に全く大恩を忘れ、自ら強盛を誇るか。我當に先に爾を戮すべきなり」と。思力は懼れて命を請うに、太宗は之を門下省に繫ぐ。

ここでは思力は唐に敵対する使者として來朝したため、執失氏が長安制圧の際の縁を反故にしたことを引き合いに太宗は思力を叱責し、拘束したことが記されている。一方、墓誌の記述では思力が太宗に策をもたらししたことが記されており、大きく矛盾する。墓誌の記述では、太宗は突厥滅亡後に思力と血を啜って盟約を結

んだと記されているのである。

牛致功氏は、この時の太宗の叱責は演技であり、実際には執失思力が唐と突厥を結ぶパイプ役になっていたと推測している。「牛致功二〇〇二、一〇一―一〇二頁」。しかしながら、七二三（開元十二）年に作られた「執失善光墓誌」には、高宗即位直後に起こった房遺愛の変に関わったとして失脚した、思力の名誉回復の意味合いがあり、善光が思力に成り代わって太宗の陵墓、昭陵に陪葬された「石見二〇〇七A、三七三―三七七頁」のであるから、思力の手柄を多少水増しして記録した可能性は考慮すべきであろう。

とはいえ、『通典』の記述中でも、「義軍入京の初め、爾父子は並びに親しく我に従えば」とあって、唐が長安を制圧した際に執失氏がそれに従軍したことが記されているように、唐と執失氏にゆかりがあったことは間違いない。そして、この便橋の事件に選んだのはそこに理由を求めてよい。そして、この便橋の事件の後、六三〇年に定襄で頡利が敗れた際には、思力が康蘇密と隋の蕭皇后との投降に関わったこと、太宗の命令で渾・斛薩両部を唐に投降させたこと、その一方で頡利から和平の使者として唐に送られていることなどを牛氏は指摘しており「牛致功二〇〇二、一〇二頁」、突厥と唐との間のパイプ役を担ったことは間違いないだろう¹²⁾。

このように、確かに思力の働きは評価に値するものだった。し

かし、なぜ思力がパイプ役として太宗の信任を得るにいたったのだろうか。その鍵を握るのが、上記の「執失善光墓誌」で便橋の事件に際して思力を太宗に送ったのは武であると記述されていることである。そこで、武の経歴を探るべくもうひとつの墓誌、「執失奉節墓誌」を見てみたい。

「執失奉節墓誌」四〇五行目「氣賀澤編二〇〇九、六七二」
 大父（＝執失武）は皇朝の上柱国・安国公・食邑三千戸なり。
 英姿は卓遠にして、智勇は凝邃^{（奥深い）}なり。草昧^{（草創期）}に往居し、擁衆して（米）¹³⁾「来」王す。叶^{（とよ）}に參墟^{（ひそ）}に元契し、私^{（封建）}かに汾水に利建せられ、東夏を掃清し、北燕を夷定す。…（中略）…父（＝執失思力）は左驍衛大將軍・定襄都督・駙馬都尉・上柱国にして、安国公を襲爵す¹⁴⁾。

この墓誌が大父の帯びる官称号から、執失思力の息子のものであることは既に指摘がある「賀梓城一九八四、五七頁／石見二〇〇七A、三七五頁／石見二〇〇七C、五九頁」。一方、この墓誌中に「東夏」と「北燕」という語が現れていることには指摘がない。この両者のうち、「東夏」とは「史善應墓誌」に用例がある。

「史善應墓誌」一〇～一二行目
 （武徳）三年、左翊衛驍騎將軍に除せらる。後に皇上の東夏を討平するに従い、恒に軍鋒に冠たり、榮勲は第一なれば、上柱国を加え、弓高侯に封ぜらる¹⁵⁾。

前稿「齊藤二〇一五、八五―八六頁」で検討したように、この「東

夏」とは河北の竇建徳が建てた夏国のことと見て間違いない。唐に帰順した阿史那氏出身の史善應は、「皇上」こと李世民的指揮下で竇建徳討伐に参戦しているが、同様に執失奉節も李世民的麾下で竇建徳と戦ったと見られる。そこで、もうひとつの「北燕」も群雄のひとつだと考えて史料を検索すると、次の史料に当たる。

『旧唐書』卷五五「高開道伝」(二二五六頁)

武徳元(六一八)年…(中略)…開道は又た其の地を取り、進みて漁陽郡を陥す。馬數千匹を有し、衆は且に萬人にならん」とすれば、自ら立ちて燕王と為り、漁陽に都す¹⁶⁾。

この記事は、河北北部の薊州漁陽郡を拠点とした高開道が、燕王を自称していたことを述べている。さらに、この記事の直後には、武徳三年に燕国を号して自立したことが記されており(同、二二五七頁)、「北燕」が高開道を指す蓋然性は高い。高開道と李世民的の軍が直接戦闘を行った記録は見当たらないものの、高開道は突厥の騎馬軍とともに恒州・幽州・定州・易州といった河北各地に攻撃を繰り返しており(同、二二五七頁)、執失氏の騎馬軍団がそれに応戦した可能性は高いだろう。すなわち、執失武は太原での李淵の起兵に突厥からの援軍として参加した後、李世民的麾下に加えられて群雄討伐に加わったと考えられるのである。

以上の検討に大過ないとすれば、執失思力が太宗のもとで信頼を得た背景には、父の武が即位前から李世民的の指揮下で軍事行動をともにしていたことが挙げられるだろう。李世民と武との個人

的な人間関係に基づき、思力がパイプ役として選ばれたのである。このように、執失氏のうち武と淹は唐の騎馬軍団の一翼を編成し、長安制圧の後も群雄討伐に貢献していた。一方で、思力は突厥の公的使者として活動している。思力が唐とのパイプ役として頡利可汗から信頼を得ていたことは、六二六年の便橋事件の後にも、六三〇年に使者として送られていることから明らかだろう。すなわち、執失氏は一族の一部を突厥、一部を唐に分けて所属させることで両者との関係を確保していた、両属性を持った一族だったと言えるだろう。

筆者が前稿で検討したところでは、執失氏以外に、阿史那什鉢苾・阿史那思摩・阿史那蘇尼失・史大奈・史善應という五人の阿史那氏の人物が、唐に完全に帰順する以前から密かに突厥を裏切り、まだ太宗に即位する前の秦王李世民と個人的な関係を結んでおり、それゆえ、唐の突厥羈縻支配は彼らに統治を委任する形で始められた「齊藤二〇一五」。唐が急速に力を持ち始めた段階で、突厥の有力者は、唐にも帰属する両属関係を取る場合が多かったのである。

三、群雄の両属性

突厥の人びとに見られる両属性は北中国の群雄にも見られる現象である。既に呉玉貴氏「一九九八、一五九頁」によって指摘があるように、豊州を拠点としていた張長遜や、雲州を拠点として

いた郭子和は弱小のため、突厥と唐との両属関係を保っていた。

『旧唐書』卷五七「張長遜伝」(二三〇一—二三〇二頁)

天下の亂れるに及び、遂に突厥に附せば、長遜を號して割利特勤と為す。義旗の建つに及びて、長遜は郡を以て降れば、五原太守を授け、尋いで豊州總管に除す。¹⁷⁾

このように、張長遜は突厥からは「割利特勤」を、唐からは「豊州總管」を与えられた。突厥よりは「特勤」とは、古代トルコ語の称号 *ṣṣ. ṣ. ṣ.* の漢字音写であり、可汗の代替わりごとに与えられる「王子」の称号である[護一九六七、三六五、四〇七頁／鈴木二〇〇五、五四—五五頁／cf. ED, p.483]。この史料には、唐に降つた際に突厥から離脱したように見えるが、実際には唐への帰順は名義上のことであつたとされる[呉玉貴一九九八、一五九—一六〇頁]。というのも、次の記事には頡利可汗の命によつて張長遜が唐の軍隊に合流したことが記されているからである。

『通典』卷一九七「边防十三 突厥上」(五四〇八頁)

初め、隋の五原太守の張長遜は亂に因り其の部する所の五城を以て突厥に隸^{したが}えば、歆は又た頡利に説きて長遜を遣わして入朝せしめ、五原の地を以て我に歸せしめんとす。頡利は並びに之に従い、因りて突厥の兵及び長遜の衆を發して、並びに太宗の軍所に會せしむ。¹⁸⁾

この時の派兵が上の『旧唐書』の記事に見える唐への帰順に当たるため、張長遜が突厥から離反したとは考えられない。『旧唐書』

の記述は本人と唐朝にとつて不利な情報を隠蔽したものと考えられよう。なお、『資治通鑑』卷一八五(五七八六—五七八七頁)は、この事件を六一八(武徳元)年に紀年している。

このように、張長遜は突厥との関係も続けながら唐に合流したのであり、唐と突厥に両属した群雄である。

続いて郭子和の場合を見てみよう。

『旧唐書』卷五六「李子和伝」(二二八二頁)

衆二千餘騎を有ち、南のかた梁師都に連なり、北のかた突厥の始畢可汗に付き、並びに子を送り質と為して自固す。始畢は先に劉武周(拠点・代州)を署して定楊天子と為し、梁師都(拠点・夏州)は解事天子と為すに、又た子和を以て平楊天子と為さんとするも、子和は固く辭して敢えて當たらざれば、始畢は乃ち更めて子和を署して屋利設と為す。武徳元年、遣使して歸款すれば、榆林郡守を授く。尋いで雲州總管を就拜し、金河郡公に封ぜらる。二年、鄜國公に進封せらる。時に師都強暴なれば、子和は攻める所と為るを慮り、尋いで兵を勅して師都を寧朔城に襲い、之に克つ。子和は既に師都と絶え、又た突厥の間鬻を伺えば、遣使して以て聞せんとするも、處羅可汗の候騎の獲る所と為り、處羅は大いに怒り、其の弟の子升を囚う。子和は自から孤危なるを以て甚だ懼る。四年、戸口を抜きて南徙すれば、詔して延州故城を以て之を居せしむ。¹⁹⁾

まず、隋が減じる以前、郭子和は突厥に帰順して屋利設となったことが記されている。設とは、古代トルコ語の称号でシャド *ṣad* の音写であり、シャドとは突厥第一可汗国において大可汗とは別に「封建的」領土・領民を有する「封建的」諸侯であった「護一九六七、三三二頁」。彼の称号の「屋利」は、ドロンプ氏によれば「屈利」の誤写であるという [Drompp 2007, p.189]。それゆえ、この「屋(屈)利設」という称号は古代トルコ語で *Köli Sad* と復元できよう²⁰。つづいて、彼は武徳元(六一八)年に唐に帰順したが、突厥を裏切って唐と連絡しようとしたところで捕らえられ、処羅可汗の怒りを買った。処羅可汗の在位は六一九〜六二〇年なので、これは唐に帰順した後のことである。もし唐への帰順が処羅可汗の認可を受けたものであれば、唐と連絡したところで怒りを買ういわれはないので、唐への帰順は処羅可汗には内密に行ったと考えられる。郭子和も唐と突厥の両者を秤にかけ、両属していたのである。最終的に郭子和が雲州を離脱して完全に唐に帰順し、延州に拠点を移したのは武徳四(六二二)年のことなので、足かけ四年間、突厥と唐の間で両属関係を継続していたことになる。

ところで、これらの群雄は「割利特勤」や「屋(屈)利設」といった突厥の称号を受けているが、これらにはどのような意味があったのだろうか。護雅夫氏は、これらの群雄に与えられた称号は突厥の固有官制に組み込まれた称号とは異なっており、別物と

して捉える必要があると指摘している [護一九六七、三三六頁]。これらの称号の中には、上の「李子和伝」に見えるように、「定楊」「平楊」などの称号が見えるが、これらは「楊氏を平定する」という意味から隋への敵対を示した称号であったと考えられている [呉玉貴一九九八、一六四頁 / Drompp 2007, p.189]。しかし、突厥は後の六二〇年に隋室の生き残りである楊政道を擁立しており [石見一九九八、八九頁]、突厥側に隋を打倒する強い意志があったとは考えにくい。とすれば、これらの称号は突厥側の要請で付与されたものではなく、群雄たちが突厥に対して認可を求めた称号ということになるだろう。上述したように、当時、突厥は漠南に中心地があり [De la Vaisière 2015]、北中国に近接する最大の勢力であった。とすれば、群雄側からすると、突厥の称号を得ることは突厥から援助を得た印であり、権威付けに大きな意義があったと考えられる。

このように、彼らは突厥から称号を受けつつ、唐にも服属するという立場を取っていた。この立場は突厥有力者と類似している。前章で述べた執失淹は突厥のエルテベルであるのと同時に唐の長安制庄に際して金紫光祿大夫・上柱国を授けられており、執失武は同じくエルテベルを継承したのと同時に、六二六(武徳九)年の便橋事件以前に上大將軍・右衛大將軍・上柱国・安国公を唐から授けられている。また、六二四(武徳七)年に李世民と盟約を結んだと見られる夾畢特勤^{テギ}の阿史那思摩 [齊藤二〇一五、八三頁]

は、武徳年間に和順郡王の爵位を与えられている『通典』卷一九七「辺防十三 突厥上」(五四一―五頁)。「このように、突厥の有力者にせよ、北中国の群雄にせよ、突厥に従いつつ、唐からの身分も受けることで生き残る可能性を探っていた。そうすればいずれかが敗北したとしてももう一方で身分を保障される可能性があったからである。

また、群雄が突厥に接近する場合だけではなく、突厥から群雄に働きかけをする場合もあった。

『旧唐書』卷五五「苑君璋伝」(二二五―二二五六頁)

君璋は部する所稍稍離散し勢蹙れば、降るを請うに、高祖は之を許し、遣使して賜うに金券を以てす。會たま突厥の頡利可汗は復た之を遣召するに、君璋は猶豫して未だ決せず。其の子の孝政曰わく、「劉武周は殷鑒と為すに足らん。今既に唐に降るも、又た頡利に歸すは、滅びを取るの道なり。糧儲は已に盡き、人情は悉く離れるに、如し更に遲留すれば、變は肘腋に生ぜん」と。恆安の人の郭子威は君璋に説きて曰わく、「恆安(『大同近郊』)の地は、王者の舊都にして、山川の形勝は、險固と為すに足る。突厥は方に強く、我が唇齒と為らん。此の堅城に據れば、天下の變を觀るに足るも、何ぞ乃ち人に降らんと欲するや」と。君璋は其の計を然りとし、乃ち我が行人を執えて突厥に送り、突厥と軍を合わせて太原の北境を寇す。

これは、六二三(武徳六)年「岑仲勉一九五八、一五一頁」の記事である。唐に帰順した苑君璋に対して、頡利可汗が改めて誘いをかけ、苑君璋は周囲の意見を参考にしつつ再び突厥に帰順したことが記されている。ここには、唐に帰順した人物を突厥が再び勧誘するという、苑君璋の帰属をめぐるいわばリクルート合戦が行われていたことが記されている。このように、群雄は自らの勢力に基づき唐と突厥の間を渡り歩いており、両勢力は彼らを自陣営に置くために勧誘を行っていたと見られる。

そのような状況下では、配下の寝返りに対して神経をとがらせるようになるのは当然のことで、唐の側も、配下が突厥に寝返ることを警戒していた。

『資治通鑑』卷一九〇「唐高祖 武徳六年条」(五九七―二頁)

突厥は弘農公の劉世讓己の患と為るを惡み、其の臣の曹般陁を遣わして、世讓は可汗と通謀し亂を為すを欲すと來言せしむれば、上は之を信ず。冬十月丙午、世讓を殺し其の家を籍す。

劉世讓は突厥使節の偽の情報により唐から突厥と通じていることを疑われ、処刑されている。外部勢力のもたらした情報を裏付けなしに鵜呑みにしたのは、それだけ内通者が多かったためだろう。この事件は、郭子和が唐に内通したことで突厥の怒りを買ったことと表裏をなす。突厥側にせよ、唐側にせよ、自陣営に属するものが相手方に通じることに目を光らせる必要があったのである。

また、偽の情報も唐にもたらしている人物はソグディアナのカブーダン出身であることを示す曹姓であり、名前の般陀も奴隷を意味するソグド語のヴァンダク vandaq と解釈できることから、曹般陀は確実にソグド人である。ソグド人が突厥唐との間を相互に引き来して情報源となっていたのであろう。

護「一九六七、六二―六九頁」によれば、突厥第一可汗国では少なくとも第八代都藍可汗期以降、ソグド人が可汗の信任を受け、集落を作って生活していたのであり、頡利可汗もソグド人を信任して利用していた。上の記事のような、唐や他の群雄との間を行き来する情報源としての役割もソグド人に期待していたのであろう。

以上のように、隋末唐初期の北中国は、人材の争奪戦が突厥と唐との間に頻繁に起きていたのである。唐だけではなく、突厥側にとっても農牧接壤地帯の人材は重要であったと考えられる。なぜなら、漠南に本拠を構え唐と対立することとなった以上、突厥が北中国農耕地帯に接触するのは必然であり、従来から突厥宮廷で活躍していたソグド人に加えて、北中国に慣れた漢人やソグド人を自陣営に引き込む必要があったと考えられるからである。以上の観点からすれば、次の史料の見え方も変わってくるだろう。

『新唐書』卷二二五上「突厥伝上」(六〇三四頁)

突厥の俗は素と質略なるも、頡利は華士の趙德言を得るに、其の人に才ありとし、之を委信し、稍や專國せしむ。又た政

を諸胡に委ね、宗族を斥遠して用いず、師を興して歲ごとに入邊すれば、下は苦に堪えず。²³

この史料は突厥が滅亡する直前の状況を示しており、頡利可汗が漢人やソグド人を優遇し、信任したために突厥に混乱がもたらされたと述べている。確かに、重用されなくなった突厥王族たちの不満は高まったに違いないが、農牧接壤地帯経営にとってやむを得ない状況だったと考えられよう。

おわりに

本稿では、隋末唐初期における突厥第一可汗国と唐との間の人の交流を検討した。その結果、執失氏のように一族を両陣営に振り分けている例や、阿史那氏の有力者のように唐との間に密かに盟約を結び、身分を確保していた例があり、群雄の中にも張長遜や郭子和のように両者に臣属している例がみられた。このように、隋末唐初期には突厥と唐の両者に臣属する両属関係を取っている有力者が、突厥にも群雄にも多数存在していたことが明らかとなった。

「はじめに」で述べたように、石見「一九九九」はこの中間地帯を二面性のある地域であると指摘している。この点は、本稿でも改めて確認できた部分である。加えて言うなら、頡利可汗が群雄のリクルートを行っていた点から明らかなように、突厥側も農牧接壤地帯に積極的に働きかけを行い、自陣営の増強に努めていた

点は見逃すべきではない。この隋末唐初の時代には、唐と突厥による農牧接壤地帯の「パイの奪い合い」が発生していたと考えるべきであろう。突厥王族が次々と唐に面属していった状況が象徴的に示すように、唐はこの奪い合いに勝利し、突厥に対して優位に立つことができたのである。

石見「二〇〇八A、六九頁／二〇一〇、八頁」は、唐の統一とは中国の統一ではなく、突厥第一可汗国の滅亡によって完成される内モンゴリアと華北の統一であるという道筋を示したが、そこにいたるまでの間に突厥との間で農牧接壤地帯をめぐる争いがあり、その争いに勝利した結果、唐は突厥の打倒にいたったと言えるだろう。

一方、遊牧政権にも農牧接壤地帯に溜まった力は大きな意味を持つていたのだろう。突厥第一可汗国は何もその力を利用して中国を征服しようとは考えていなかったであろうが、中国を征服するためだけにその力を使うとは限らない。遊牧国家の勢力増大にもそれは有効だったはずである。実際、鈴木宏節氏が指摘しているように、突厥第二可汗国は農牧接壤地帯から登場し、漠北まで拡大していった勢力だったのである〔鈴木二〇〇六、二五―二六頁〕。これまでほとんど検討されてこなかった、農牧接壤地帯の遊牧国家に対する影響の一端として、本稿の検討は意義を有している。今後は、農牧接壤地帯がモンゴル高原の遊牧民族史に与えた影響を、さらに検討していきたい。

注

- (1) 名称に微妙な差異はあれど、廣瀬二〇一〇／森部二〇一〇／古松二〇一〇／山内二〇一〇などで東部ユーラシアという地域区分が使われている。
- (2) この中間地帯は、ほかに妹尾「二〇〇一、三〇―三四頁」では「農業―遊牧境界線」、妹尾「二〇〇六」では「農業―遊牧境界地帯」、李鴻賓「二〇一〇―一A B」では、「長城区域」などと呼ばれている。
- (3) 森部二〇一〇、二〇一三、二〇一四／山下二〇一〇、二〇一四／村井二〇〇三、二〇〇八、二〇一〇、二〇一五／森部・齊藤二〇一三／齊藤二〇一五／西村二〇〇五、二〇〇八、二〇〇九、二〇一〇など。
- (4) 突厥の歴史は、建国から唐に一旦滅ぼされるまでの「突厥第一可汗国」(五五二―六三〇年)、唐の間接統治を受けた「羈糜支配時代」(六三〇―六八二年)、唐の支配を脱してから、ウイグルなどの敵対部族によって滅ぼされるまでの「突厥第二可汗国」(六八二―七四五年)の三つの時期に分けられる。
- (5) 隋末唐初期の戦乱について概括的に述べた研究として、小笠原一九五〇／鈴木一九五二／横田一九五三A B／漆侠一九五四／氣賀澤一九七九、一九八二／布目二〇〇三などがある。個別テーマの研究は膨大なので割愛する。
- (6) De la Vaisière 2015。それ以前から岩佐一九三六、八四―八五頁／岑仲勉一九五八、九七八―九八五頁／Cragg et al. 1962, pp.66―68, n.214／林俊雄一九八五、一一二頁／張二〇〇七／鈴木宏節二〇一〇、五二頁などで漠南に中心地があると示唆されていたが、論証を経ていたわけではなかった。筆者もこの点を論証すべく口頭発表を行ったことがあった〔齊藤二〇〇七〕が、文章化にいたっていないかった。
- (7) 雁門事変の先行研究としては、護一九六七、一七三―一七六頁／呉玉貴一九九八、一五―一五二頁／袁剛二〇〇二／許益二〇〇七／王援朝二〇一二／朱振宏二〇一五などがある。
- (8) 曾祖淹、本蕃頡利發。皇初起太原、領數千騎援接至京、以功拜金

紫光祿大夫・上柱國。仍降 特制、以執失永爲突厥大姓、新昌縣樹功碑。：(中略)：祖武、本蕃頡利發。以元勳之子、 皇授上大將軍・右衛大將軍・上柱國・安國公。于時頡利可汗率百萬之衆寇至渭橋、蟻結蜂飛、雲屯霧合。祖即遣長子思力入朝獻策。太宗嘉其誠節、取其謀効、遣與李靖計會、内外應接、因擒頡利可汗。賊徒盡獲、 太宗與思力歃血而盟曰、「代代子孫、無相侵擾」。即賜金券、因尚九江公主、駙馬都尉、贈武輔國大將軍。

(9) 大唐起義太原、劉文靜聘其國、引以爲援。始畢遣特勒・康稍利獻馬千匹、會於絳郡、又遣二千騎助軍、從平京城。

(10) 唐が財貨を支払ったことで突厥が退却したという記録は、『旧唐書』など、唐の歴史書では隠蔽されて明記されず、先行研究では断片的に残された記述をもとにそのように推論したのであった。ところが、北宋の端拱二(九八九)年正月、戸部郎中張洎の上疏中には、次のような文言がある。

『宋会要輯稿』「蕃夷一之二〇」

昔者隋季板蕩するに、唐室は勃興すれば、高祖・太宗は肇めて天位に升り、英・衛・房・杜は佐命の雄と爲る。頡利可汗は遽かに京邑を犯せば、太宗は躬ら車駕を枉げ、以て其の夙好を敦くし、廣く財貨を輸し、以て其の貪心を厭う。(昔者隋季板蕩、唐室勃興、高祖・太宗肇升天位、英・衛・房・杜爲佐命之雄。頡利可汗遽犯京邑、太宗躬枉車駕、以敦其夙好、廣輸財貨、以厭其貪心。)この記述から、便橋事件の際に太宗が財貨を払って突厥に撤退をうながしたと、北宋初期の官僚たちが認識していたことが明らかである。当時はまだ原史料が残っていた可能性が高く、『旧唐書』の記述は鵝呑みにされていなかったのだろう。そして、この記述から、唐が財貨を支払って退却をうながしたという、先行研究の推論に強力な傍証が与えられたと言えよう。

(11) 癸未、頡利遣其腹心執失思力來朝、自張形勢、云「兵百萬今至矣」。太宗謂之曰、「我與突厥、面自和親、汝則背之、我實無愧。又義軍入京之

初、爾父子並親從我、賜爾玉帛、前後極多。何故全忘大恩、自誇強盛。我當先戮爾矣。」思力懼而請命、太宗繫之於門下省。

(12) 山下將司氏が指摘するように、唐に降ったトルコ系遊牧民は太宗との紐帯を強調する傾向があり、中には先祖と太宗との虚偽の紐帯を記した石刻史料も存在する「山下二〇一一、六一七頁」のは事実である。とはいえ、唐代の石刻史料は歴史書編纂のために史館に提出する行状を参考に撰文された例もあるように、事実に基づきながら文飾を施すのが一般的と考えられる。「石見二〇〇七B、一三二二頁/石見二〇〇八B、一一九一一二〇頁」。それゆえ、本人や直近の近親者の具体的な挿話まですべて虚構であると断じることができない。

(13) 本墓誌は文字の判読が困難な凶録が多いが、最も判読しやすい「新中国出土墓誌 陝西(貳)」「三〇頁」の写真を見る限りではこの字は「米」と彫られているように見える。実際、これまで公刊された録文はすべて「米」とするが、「米」では意味が取れない。ここでは、一画違いの「來」の誤刻であると判断する。「來王」とは、天子の元に來朝することである。

(14) 大父 皇朝上柱國・安國公・食邑三千戶。英姿卓遠、智勇凝邃。往居草昧、擁衆米王。叶元契於參墟、私利建於汾水。掃清東夏、夷定北燕。：(中略)：父左驍衛大將軍・定襄都督・駙馬都尉・上柱國、襲爵安國公。

(15) 三年、除左翊衛驃騎將軍。後從(改行) 皇上討平東夏、恒冠軍鋒、榮勳第一、加上柱國、封弓高侯。

録文ならびに拓本写真の情報は、齊藤「二〇一五、八五頁」を参照のこと。

(16) 開道又取其地、進陷漁陽郡。有馬數千匹、衆且萬人、自立爲燕王、都于漁陽。

(17) 及天下亂、遂附于突厥、號長遜爲割利特勒。及義旗建、長遜以郡降、授五原太守、尋除豐州總管。

(18) 初、隋五原太守張長遜因亂以其所部五城隸於突厥、歆又說頡利遣長

遜入朝、以五原地歸於我。頡利並從之、因發突厥兵及長遜之衆、並會於太宗軍所。

- (19) 有衆二千餘騎、南連梁師都、北附突厥始畢可汗、並送子為質以自固。始畢先署劉武周為定楊天子、梁師都為解事天子、又以子和為平楊天子、子和固辭不敢當、始畢乃更署子和為屋利設。武德元年、遣使歸款、授榆林郡守。尋就拜雲州總管、封金河郡公。二年、進封鄜國公。時師都強暴、子和慮為所攻、尋勒兵襲師都寧朔城、克之。子和既絕師都、又伺突厥間釁、遣使以聞、為處羅可汗候騎所獲、處羅大怒、囚其弟子升。子和自以孤危、甚懼。四年、拔戶口南徙、詔以延州故城居之。

- (20) ドロンプ氏は「屈利設」を *Kül* (C) *Sad* と復元するが、内藤「一九九八、二〇一頁」は、屈利は *Kül* を写すときのみに利用されると指摘しているため改める。また、ドロンプ氏は *Kül* に三人称接尾辞の付いた *Kül* (C) と、*ü* の形を想定したが、現在では *Kül* と読むのが一般的である。というのも、突厥文字やウイグル文字に *ü* と *o* の書き分けがないがために、この単語は当初、*Kül* と読まれる場合が多かったのであるが、研究の進展によって *Kül* と読み改められたからである。すなわち、カーシュガリーの辞書は *Kül* の意味に「灰」しか挙げておらず [CTD, I, p. 267]、反対に *köl* は *köl irkin* という称号に使われる例を挙げ *ü* [CTD, I, p. 137]、その智慧が湖の如く集められ充ちたもの」という含意により「湖」という意味を提示しているからである。これを受けてハミルトン氏 [Hamilton 1962, p. 52, n.10] やバザン氏 [Bazin 1981] は、これま *Kül* と読まれた称号 (例えば *Kül Tegin*) は *Köl* と読み改める必要があると指摘しており、内藤氏が屈利を *köl* と転写したのはこれらの説を受けたことによる。それゆえ、本稿でもドロンプ氏の転写を *Köl Sad* に改めている。

- (21) 君璋所部稍稍離散勢蹙、請降、高祖許之、遣使賜以金券。會突厥頡利可汗復遣召之、君璋猶豫未決。其子孝政曰、「劉武周足為股鑿。今既降唐、又歸頡利、取滅之道也。權儲已盡、人情悉離、如更遲留、變生肘腋」。恆安人郭子威説君璋曰、「恆安之地、王者舊都、山川形勝、足

為險固。突厥方強、為我臂齒。據此堅城、足觀天下之變、何乃欲降於人也」。君璋然其計、乃執我行人送於突厥、與突厥合軍寇太原之北境。(22) 突厥惡弘農公劉世讓為己患、遣其臣曹般隨、來言世讓與可汗通謀欲為亂、上信之。冬十月丙午、殺世讓籍其家。

- (23) 突厥とソグド人の関係については、護「一九六七、第一編第二章」、齊藤「二〇一四」を参照のこと。
- (24) 突厥俗素質略、頡利得華士趙德言、才其人、委信之、稍專國。又委政諸胡、斥遠宗族不用、興師歲入邊、下不堪苦。

参考文献

『通典』／『旧唐書』／『新唐書』／『資治通鑑』＝中華書局標点本
 CTD = Dankoff, R. / Kelly, J. (Tr.) 1982-1985: *Mahmud al-Kasfari, Compendium of the Turbic Dialects*, I-III.
 ED = Clauson, G. 1972: *An Etymological Dictionary of the Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.
 岩佐精一郎 一九三六「突厥の復興に就いて」和田清(編)『岩佐精一郎遺稿』岩佐傳一発行、七七一―六七頁。
 石見清裕 一九九八「唐の北方問題と国際秩序」(汲古叢書一四) 汲古書院。
 一九九九「ラティモアの辺境論と漢唐間の中国北辺」、唐代史研究会(編)『唐代史研究会報告集第八集 東アジアにおける国家と地域』東京、刀水書房、二七八―二九九頁。
 二〇〇七A「突厥執失氏墓誌と太宗昭陵」記念論集刊行会(編)『福井重雅先生古稀・退職記念論集 古代東アジアの社会と文化』東京、汲古書院、三六三―三七九頁。
 二〇〇七B「唐代墓誌史料の概観―前半期の官撰墓誌・規格・行状との関係―」『唐代史研究』一〇、三一―二六頁。
 二〇〇七C「唐代テュルク人墓誌とその史料的价值」氣賀澤保規(編)『中国石刻資料とその社会―北朝隋唐期を中心に―』(明治大学東洋史資料叢刊四) 東京、明治大学東アジア石刻文物研究所／汲古書院、三五―

六五頁。

——二〇〇八A「唐とテュルク人・ソグド人―民族の移動・移住より見た東アジア史―」『東アジア世界史研究センター年報』一、六七―八二頁。

——二〇〇八B「唐代墓誌の資料的可能性」『史淵』三〇、一〇九―一二二頁。

——二〇一〇「唐の成立と内陸アジア」『歴史評論』七二〇、四―一六頁。

小笠原正治 一九五〇「隋朝末期の動乱における官僚群」『史潮』四三、二八―三七、七二頁。

氣賀澤保規 一九七九「隋末唐初の諸反乱の評価をめぐって」『東洋史苑』一三、一―一五頁。

——一九八二「最近の農民戦争史研究の動向―隋末唐初期を中心にして―」『唐代史研究会報告 第四集 中国歴史学会の新動向―新石器から現代まで―』東京、刀水書房、一一―一三二頁。

——(編)二〇〇九『新版 唐代墓誌所在総合目録(増訂版)』明治大学東アジア石刻文物研究所。

齊藤茂雄 二〇〇七「漠南における突厥第一可汗国の活動―七世紀初頭を中心にして―」二〇〇七年三月二五日、第七回遼金西夏史研究会大会(関西大学)。

——二〇一四「突厥とソグド人―漢文石刻史料を用いて―」森部豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交流』東京、勉誠出版、二一七―二三三頁。

——二〇一五「突厥有力者と李世民―唐太宗期の突厥羈縻支配について―」『関西大学東西学術研究所紀要』四八、七七―九九頁。

鈴木宏節 二〇〇五「突厥阿史那思摩系譜考―突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オールドスの突厥集団―」『東洋学報』八七一、三七―六八頁。

——二〇〇六「三十姓突厥の出現―突厥第二可汗国をめぐる北アジア情勢―」『史学雑誌』一一五―一〇、一―三六頁。

——二〇一〇「唐代漠南における突厥可汗国の復興と展開」『東洋史研

究』七〇―一、三五―六六頁。

鈴木俊 一九五二「隋末の乱と唐朝の成立」『史淵』五三、五三―七〇頁。
妹尾達彦 二〇〇一「長安の都市計画」(講談社選書メチエ一二三) 東京、講談社。

——二〇〇六「都の立地―中国大陸の事例―」『人文研紀要』五八、一四―一七頁。

谷川道雄 一九九五「隋末の内乱と民衆―剽掠と自衛―」『東洋史研究』五三―四、五五―八二頁。

那波利貞 一九六五「唐代の長安城内の朝野人の生活に浸潤したる突厥風俗に就きての小攷」『甲南大学文学会論集』二七、一―五三頁。

西村陽子 二〇〇五「唐末五代代北地区沙陀集團内部構造再探―以《契苾通墓誌銘》为中心―」『文史』二〇〇五―四、二二―二八頁。

——二〇〇八「唐末五代の代北における沙陀集團の内部構造と代北水運使―「契苾通墓誌銘」の分析を中心として―」『内陸アジア史研究』一三三、一―二四頁。

——二〇〇九「唐末「支谯墓誌銘」と沙陀の動向―九世紀の代北地域―」『史学雑誌』一一八―四、一―三八頁。

——二〇一〇「九―一〇世紀の沙陀突厥の活動と唐王朝」『歴史評論』七二〇、六一―七五頁。

布目潮瀨 二〇〇三「隋唐革命管見」『布目潮瀨中国史論集 上巻』東京、汲古書院、一二―一三九頁。

内藤みどり 一九九八「突厥キョリリチヨル考」『内陸アジア史研究』一三、一―三三頁。

林俊雄 一九八五「略奪・農耕・交易から見た遊牧国家の発展―突厥の場合―」『東洋史研究』四四―一、一―一三六頁。

廣瀬憲雄 二〇一〇「倭国・日本史と東部ユーラシア―六―一三世紀における政治的連関再考―」『歴史学研究』八七二、三〇―三八頁。

古松崇志 二〇一〇「一〇―一三世紀多國並存時代のユーラシア(Eurasia) 東方における国際関係」『中国史学』二二、一―三三―三〇頁。

- 村井恭子 二〇〇三「押蕃使の設置について―唐玄宗期における対異民族政策の転換―」『東洋学報』八四―四、二九―六〇頁。
- 二〇〇八「九世紀ウイグル可汗国崩壊時期における唐の北辺政策」『東洋学報』九〇―一、三三―六七頁。
- 二〇一〇「唐宣宗時期的西北辺境政策試析」『唐研究』二六、二七九―三〇四頁。
- 二〇一五「河西と代北―九世紀前半の唐北辺藩鎮と遊牧兵―」『東洋史研究』七四―一、四七―八二頁。
- 護雅夫 一九六七『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社。
- 森部豊 二〇一〇「ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開」(関西大学東西学術研究所研究叢刊三六)吹田、関西大学東西学術研究所。
- 二〇一三「安祿山」研究篇(森部豊(研究代表)『ソグド人の東方活動に関する基礎的研究』平成二二年度―平成二四年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、九―四六頁。
- 二〇一四「八世紀半ば―十世紀の北中国政治史とソグド人」森部豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交流』東京、勉誠出版、一七四―一七七頁。
- 森部豊／齊藤茂雄 二〇一三「舍利石鐵墓誌の研究」『関西大学東西学術研究所紀要』四六、一―二〇頁。
- 森安孝夫 二〇〇七『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史 第〇五卷)東京、講談社。
- 山内晋次 二〇一〇「九世紀東部ユーラシア世界の変貌―日本遣唐使関係史料を中心―」財団法人古代学協会(編)『仁明朝史の研究―承和転換期とその周辺―』京都、思文閣出版、三―三〇頁。
- 山下将司 二〇一〇「唐のテュルク人蕃兵」『歴史学研究』八八―一、一―一頁。
- 二〇一四「唐の「元和中興」におけるテュルク軍団」『東洋史研究』七二―四、一―三五頁。
- 横田滋 一九五三A「七世紀初頭の中国における内乱に就いて(上)」『東洋史研究』一一―四、一―一四頁。
- 一九五三B「七世紀初頭の中国における内乱に就いて(下)」『東洋史研究』一一―五、七〇―八六頁。
- 岑仲勉 一九五八『突厥集史』(全二冊)北京、中華書局。
- 陳寅恪 一九五一「論唐高祖称臣於突厥事」『嶺南学報』一一―二。(再録：『陳寅恪集 寒柳堂集』北京、生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇一、一〇八―一二二頁)
- 賀梓城 一九八四「唐王朝与边疆民族和隣国の友好關係―唐墓誌銘簡記之一―」『文博』一、五六―六〇頁。
- 李方 二〇〇三「隋末唐初東突厥与中原勢力的關係」『中国边疆史地研究』二〇〇三―四、一六―二七頁。
- 李鴻賓 二〇一〇A「長城区域在唐史研究中的位置―從歷史学与民族学結合的角度觀察―」『唐朝的北方辺地与民族』銀川、寧夏人民出版社、一〇〇―一三三頁。
- 二〇一〇B「再論長城区域在唐史研究中的位置」『唐朝的北方辺地与民族』銀川、寧夏人民出版社、一一四―一二七頁。
- 李樹桐 一九六五「唐高祖称臣於突厥考辨」『唐史考辨』台北、台湾中華書局、二二四―二四六。
- 一九七二「再辨唐高祖称臣於突厥事」『唐史新論』台北、台湾中華書局、六九―一八頁。
- 一九八八「三辨唐高祖称臣於突厥事」『唐史索隱』台北、台湾商務印書館、一―三一頁。
- 劉健明 一九九九『隋代政治与对外政策』台北、文津出版社。
- 牛致功 二〇〇二「関于唐与突厥在渭水便橋議和罷兵的問題―讀《執失善光墓誌銘》」『唐代碑石与文化研究』三秦出版社、九一―一〇三頁。
- 漆俠 一九五四『隋末農民起義』上海、華東人民出版社。
- 王榮全 一九九八「有関唐高祖称臣于突厥的幾箇問題」史念海(主編)『唐史論叢(第七集)』西安、陝西師範大学出版社、二二四―二三七頁。
- 王援朝 二〇一二「雁門之困与隋末唐初形勢」『唐史論叢』一五、二六―三六頁。

- 吳玉貴 一九九八『突厥汗国与隋唐關係史研究』中国社会科学出版社。
- 許益 二〇〇七「試析「雁門事變」發生及解除之原因」『山西大同大学学报（社会科学版）』二一—三、二九—三三頁。
- 袁剛 二〇〇二「說隋大業十一年雁門事變」『大同職業技術學院學報』一六一—二一八—三三頁。
- 張文生 二〇〇七「東突厥建牙漠南小考」『中国边疆史地研究』一七一—三、六九—七一頁。
- 朱振宏 二〇一五「大業十一年（六一五）「雁門事變」探微」『西突厥与隋朝關係史研究（五八一—六一七）』新北 稻鄉出版社，三六一—四〇八頁。
- Bazin, L. 1981: Käl tegin ou köl tegin? In: Veenker, W. (ed.), *SCHOLIA: Beiträge zur Turkologie und Zentralasienkunde: Annemarie von Gabain zum 80. Geburtstag am 4. Juli 1981 dargebracht von Kollegen, Freunden und Schülern* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica Band 14), pp. 1–7.
- Bombaci, A. 1970: On the Ancient Turkic Title Etläbär. In: *Proceedings of the IXth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*, Naples, pp. 1–66.
- Czegledy, K. 1962: Čoyay-Quzi, Qara-Qum, Kök-Öng. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 15–1/3, pp. 55–69.
- De la Vaisière, E. 2015. Away from the Örügen: A Geopolitical Approach to the Seventh Century Eastern Türks. In: Bemann, J. / Schnauder, M. (eds.) *Complexity of Interaction along the Eurasian Steppe Zone in the First Millennium CE*, Bonn, pp. 454–461.
- Hamilton, J. 1962: Toquz-oryuz et On-uyγur. *Journal Asiatique* 250–1, pp.23–63.

Northern China and the First Turkic Qaghanate in the late Sui to early Tang dynasty

SAITO Shigeo

This research analyzes historical sources such as epitaphs and classical Chinese texts, to focus on political tendencies among both the nomadic tribes of the First Turkic Qaghanate and warlords in northern China in the late Sui to the early Tang dynasty. The analysis reveals that the Zhishi 執失, a powerful Turkic tribe, was split by allegiances to both the Qaghanate and the Tang, so that while Zhishi Sili 執失思力 played a key role as a chief vassal of Xieli Qaghan 頡利可汗, Sili's father, Zhishi Wu 執失武, formed a cavalry corps under Li Shimin 李世民.

On the other hand, of the warlords that maintained spheres of influence in northern China, those with only relatively limited power, such as Zhang Changsun 張長遜, Guo Zihe 郭子和, and Wan Junzhang 苑君璋, swore their allegiance to both the Türks and the Tang at the same time. Both the Türks and the Tang felt it to be dangerous that these warlords pledged their allegiance to the other side, and sometimes carried out attacks or executions when they ascertained that this was the case. Conversely, there were also cases in which they encouraged the warlords to betray the other side. It is thought that both the Türk nomadic tribes and those warlords with minor spheres of influence sought to survive by shifting between both sides.

キーワード：突厥 (Türks)、唐 (Tang)、内陸アジア史 (Inner-Asian history)、
中国史 (Chinese history)、東部ユーラシア (Eastern Eurasia)